

## 刊行の辞

理事長 山崎 吉朗 YAMAZAKI Yoshiro<sup>1</sup>

本号で第9号となりました。次は10号の記念号となります。

言い古されたいい方ですが、「十年ひと昔」ということばがあります。筆者がこのことばを最初に知ったのは、小学生の時、壺井栄の『二十四の瞳』を読んだ時と記憶しています。

今回、改めて読んでみました。

「十年をひと昔というならば、この物語の発端は今からふた昔半もまえのこととなる。」という文で始まり、普通選挙(男子のみ)が初めて行われた昭和三年の小石先生赴任から物語は展開していきます。半世紀以上前に読んだ記憶が正確だったと思うと共に、「昭和三年」という物語の始まりに驚きました。こちらの記述は全く記憶がありませんでした。私事になりますが、筆者の両親は昭和三年生まれでした。来年10年を迎える本研究会誌について考えた時にふと思いついた『二十四の瞳』が、実は両親が生まれた年に始まる物語だったということに、運命を感じました。両親から筆者が生まれ、そして仲間達と共に生を与えた研究会誌が10年を迎える前夜となりました。

いささか感傷的な書き出しになりましたが、それほど、この「10」という数字に重きを置いています。10年続けばその次につながると、創設時メンバーの白山理事と話し合ったことを思い出します。

創刊号には、JACTFL 発足と共に、研究会誌を刊行する経緯や意欲を細かく書いていました。筆者自身も忘れてしまっていた事もありました。少し引用してみます。

「一昨年(2012年)12月3日に日本外国語教育推進機構 JACTFL を設立した。20年間単独で行動して来た筆者にとって組織を作ることは悲願であった。それが実現した。最後の切り札である。そして、この機構の目的を実現するために大きな比重を占めるのがこの会誌である。外国語教育の流れを変える必要性を関係者、そして世間に訴え、流れを変化させるための手段である」

「悲願を実現した」、そして、「外国語教育の流れを変化させるための手段」として、

---

<sup>1</sup> 所属:日本私学教育研究所 The Education Institute for Private Schools in Japan

会誌を創刊したと記述していました。昨年報告したように、2020年3月26日には、日本学術会議から日本学術会議協力学術研究団体の通知を受けました。「流れを変化させるための手段」として創刊した会誌がアカデミックの世界で受け入れられたという事を改めて喜びたいと思います。大きな一歩でした。

また創刊号では、JACTFL の元となった複言語教育研究会(筆者の所属している一般財団法人日本私学教育研究所の研究会として2007年に創設)で作成した「多言語・複言語教育研究」を発展させたものが本研究会誌であると記しています。

「機構発足の前年には文科省の予算が付き、『多言語・複言語教育研究 No1(財団法人日本私学教育研究所発行)』という会誌を、…(中略)…11の論文や記録を載せて刊行していた。ISSNも取得して翌年には第2号を発行予定であった。予算のつかない2年めは自主発行することにして研究会の度に少しずつ貯金して発行の準備を進めていた。その過程で本機構が設立された。そこで、会誌発行は延期することになった。同会誌を発展させ、機構の会誌とすることとしたのである。一度集めた原稿は大きく書き直し、さらに新しい原稿をたくさん加え、今回の発行となった」

無から有は生まれません。創刊号で終わってしまった「多言語・複言語教育研究」を発展させて、本研究会誌が創刊されたのです。JACTFLも本会誌も、基礎固めが出来ていたところに立ち上がったということになります。そこには創立メンバーの強い意志と結束があると言えるでしょう。

創刊号の内容について次のように書いています。

「会誌は、理事からの9つの挨拶文、7つの論文、JACTFLアンケートの報告で構成している。扱われている言語も多岐に亘り、中等教育全体を俯瞰するものから、フランス語、ドイツ語、スペイン語、ロシア語、中国語、韓国語と、まさに JACTFL でしか作り出せない会誌となっている。」

「JACTFL でしか作り出せない会誌」と自負したスタートとなりました。合わせて JACTFL 発足についても次のように記しました。

「英語教育ばかりの国の方針を疑問視している関係者がそれだけ多いと言える。昨年シンポジウムに集まった220名を超える参加者、設立1年で100名を超えた入会

者、このように多くの支持を集めた組織となっている、ある意味、待ち望まれた組織であると言えるだろう」

「待ち望まれた組織」として、少なくとも JACTFL にしか出来ないことを積み重ねて来たという自負を創設メンバーは持っています。

一步一步です。

また、この文章を書くために過去の資料を調べていたところ、筆者が一般財団法人(当時は財団法人)日本私学教育研究所に所属して最初に作成した「中等教育における英語以外の語学教育(調査資料 243 財団法人日本私学教育研究所刊)」の「刊行のことば」が目にとまりました。本研究所の元所長故山岸駿介の文章です。山岸氏は長らく朝日新聞で教育専門の記者として活躍し、多摩大学客員教授を経て、研究所の第7代所長に就任していました。外国語教育は専門ではありませんが、下記のような文章を載せています。

「本研究所は、これまでに 240 余点の調査資料を刊行し、多くの方々に利用していただけてきました。たとえば「私立学校教職員の資質向上に関する調査研究」とか「私立高等学校における特色ある教科・科目の実践」等々です。だが、それらと比較すると、本書のような報告書は地味なものですし、英語以外の外国語に関心のない人だと、手にとってみることさえしないかもしれません。大学でさえ、英語以外の外国語を履修する学生がどんどん減り、教える教員も減らされているという時期に、中学、高校において「英語以外の語学教育」をどうするか、何を教育すればいいのか…(中略)…語学教育の重要な方向を見つけ、力をつけようという、ドン・キホーテのような報告書だからです。

日本人は、英語さえ勉強しておけば、いつでも、どこに行っても通じると考え、英語には高い関心を示しますが、英語以外の言葉には、目もくれないのが普通です。でも、…(中略)…ここに収録されたレポートを読むと、外国語の種類以上に内容が多彩で、いろいろなことを考えさせてくれます。教養書でもあり同時に、本書に刺激されて「英語以外の外国語」の教育を取り入れ、中学生、高校生の関心をその方向に向けさせてくれるかもしれない実践の書になることも期待できます。

この一冊の本が、私立学校だけでなく、全国の中学、高校に、いい影響を及ぼしてほしい。心からそう願っています」

内容を把握して「刊行のことば」を書かれたということがよく分かります。たいへんありがたいことです。山岸氏は 2008 年まで所長を務められ、2 年後に亡くられました。改めてご冥福をお祈りすると共に、遺言のようなこのことばを大切にしたいと思います。「この一冊の本が、私立学校だけでなく、全国の中学、高校に、いい影響を及ぼしてほしい」の主語を JACTFL にしたいものです。

10 年になるということで、前置きがたいへん長くなってしまいました。

本年の「刊行の辞」で触れておかなければいけないことがあります。言うまでもなくコロナ禍です。昨年は、「21 世紀最大の危機的状況になり、その解決の糸口も見えていません」と記しました。しかし、執筆した時には少なくとも一年後には少し先が見えているだろうという思いがありました。予想は大きくはずれました。一年を経て、今も解決の糸口はまったく見えません。

その中で、2021 年度は、従来年 1 回のシンポジウム(約 160 名参加)に加え、下記に示すように、1 回のオンラインシンポジウム、3 回のオンライン特別講演会を実施し、延べ 650 名の方々にご参加頂きました。

#### 【第 4 回 JACTFL オンラインシンポジウム】

○「コロナ禍で推進する高校・大学の国際化－これからの国際交流のあり方を考える－」

開催日時:2021 年 9 月 12 日(日)14 時 00 分～17 時 00 分

参加者:約 150 名

#### 【JACTFL 特別講演会】

○「子どもの頃から体験してきたコミュニケーションの曖昧性と大切さ」

開催日時:2021 年 3 月 28 日(日)15 時 00 分～16 時 30 分

講演者:吉田 研作(上智大学名誉教授)

参加者:約 150 名

○「CEFR と CARAP(FREPA)－AI 時代に求められる教授法、それは文法・訳読式教授法－」

開催日時:2021 年 6 月 27 日(日)14 時 00 分～17 時 00 分

講演者:大木 充(京都大学名誉教授)

参加者:約 240 名

○「日本の大学教育の未来を考える－「大学入試のあり方に関する検討会議」の議論から－」

開催日時:2021 年 10 月 9 日(土)15 時 00 分～16 時 30 分

講演者: 芝井 敬司 (関西大学理事長)

参加者: 約 110 名

メモ程度の概括をしておきます。

コロナ禍でも国際交流をどう工夫するかの実情と未来についてのオンラインシンポジウムの実施は全国でもおそらく最初期の取り組みだったと自負しています。一般社団法人大学行政管理学会 (JUAM) の全面的な協力を得て、実施することが出来ました。

副理事長でもある吉田研作先生の講演は、他では聞く事が出来ない個人的なお話しも盛り込んで頂き、楽しく、学びの多い講演でした。大木充先生には、他では時間切れになる数々のお話しをたっぷり語って頂き、多くの方にご参加頂きました。芝井敬司先生は、文科省の中教審で英語教育偏重を批判し、複言語・多言語教育の重要性を、孤軍奮闘で発言されている唯一の委員です。その背景にある深いお考えなどを存分に語って頂き、まさにこのテーマに関する全国初のご講演だったと確信しています。

パネリストの皆様、講演者の皆様、そして参加者の皆様に深く感謝致します。多くの参加者の方々に JACTFL にしか出来ない企画だとおっしゃって頂きました。

さて、来年が 10 回目となる研究会誌は、前祝いのように、特別寄稿 1 本、論考 5 本、報告 4 本、特集 (高校生) 5 本、書評 1 本、シンポジウム実施報告 3 本で構成されています。

とりわけ、部署を移られたのにご寄稿頂いた、文科省の前外国語教育推進室長小野賢志様には心より御礼申し上げます。小野様には未来に繋がる文科省の政策についてお書き頂きました。日本の複言語・多言語教育を推進している JACTFL の姿勢への共鳴故の寄稿だと考えています。また、ここで、第 2 号について触れておきたいと思います。第 1 号発行は前述したように、心配していませんでした。既に準備していた原稿があり、その原稿と理事の挨拶で出来上がるだろうと考えていました。事実、立派な創刊号が出来ました。しかし、2 号のことは全く考えていませんでした。その 2 号の時に、当時の外国語教育推進室長圓入由美様に寄稿して頂きました。文科省の多言語・複言語政策についての貴重な論文でした。改めて、今回の小野様、圓入様には感謝申し上げたいと思います。

会員数も増加し、現在、会員は約 260 名、賛助会員は 10 団体です。創設時に「設立 1 年で 100 名を超えた入会者」と書きましたが、3 倍に迫ろうとしています。会

員の皆様に心より感謝申し上げます。

毎年上智大学で行って来たシンポジウムは2年連続でオンラインでの開催となります。今回は10年目の記念すべき大会なのに残念ではありますが、オンラインならではの利点で、基調講演はアメリカ在住の當作靖彦理事(カリフォルニア大学サンディエゴ校教授)にお願いしました。このJACTFLということばは、當作先生が提案されたことばです。まさに生みの親である當作先生に講演して頂き、原点に戻って、今後のJACTFLの方向性を改めて考えていきたいと思っています。会員の皆様のご協力を頂ければ幸いです。

最後になりますが、広告が掲載されて8年目になりました。広告掲載各社及び賛助会員の皆様には、JACTFLを大きく支えて頂いています。この場を借りて厚く御礼申し上げます。本当にありがとうございます。